AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

卒業研究抄録集（看護学科）(2017.12) 平成29年度:27-28.

看護学生の実習適応感とシャイネスの関連－学年による比較－

金 有加里, 吉田 愛美

看護学生の実習適応感とシャイネスの関連
—学年による比較—

金有加里　吉田愛美
（指導：苫米地　真弓）

緒言

看護学生が実習を成功させるためには実習への「適応感」が必要であると考えられており、また、「社会的スキル」を獲得しているものほど実習適応感が高いと言われている。[1) 2)]

そこで私たちは、社会的スキルとの関連から、看護学生の実習適応感にシャイネス傾向が影響しているのではないかと考えた。

本研究では、シャイネス傾向が低い学生ほど実習適応感が高くなる。また、学年が上がることにより、実習適応感は高くなり、反対にシャイネス傾向は低くなるとの仮説を立て、検討した。

用語の定義

【実習適応感】：臨地実習への積極的かつ主体的な目標達成行動や意識[3)]

【シャイネス】：対人不安の下位概念であり、対人場面で相手の反応に応じて自分の反応も変化させるような随伴的な場面で生じる反応[4)]

方法

研究対象：実習経験のあるX大学医学部看護学科2～4年生。

調査期間：平成29年8月下旬から9月上旬。

調査方法：無記名自記式質問用紙を集合法で配布し、留め置き法で回収した。

測定指標：基本属性（学年、年齢、部活・サークル・ボランティア団体の所属の有無、アルバイト経験の有無）、高橋ら[1)]の実習適応感尺度（下位尺度とその設問数は、【取り組み姿勢】6問、【自己評価】6問、【学習準備状況】5問、【基本的信頼感】4問の4つである。得点が高いほど実習に対する適応感が高いことを意味する。）、鈴木ら[4)]の早稲田シャイネス尺度（下位尺度は、【消極性】、【緊張】、【過敏さ】、【自信のなさ】、【不合理な思考】の5つであり、設問は5問ずつである。得点が高いほどシャイネス傾向が高いことを意味する。）を用い、質問紙を作成した。

データ分析方法：2群間の比較にはMann-WhitneyのU検定を、3群間の比較にはKruskal Wallisの独立検定を行った。実習適応感とシャイネスの関連を見るために、Spearmanの順位相関係数を用いた。有意水準は5%とし、統計ソフトはSPSSver.22を用いた。

倫理的配慮：口頭及び文書で研究の趣旨を説明し、自由意思による参加であり、不参加によって不利益を被らないことを伝えた。また、回答をもって研究への同意を得たものとし、匿名性を保ち、収集したデータは本研究以外では使用せず、研究終了後は裁断処理し破棄することを伝えた。

結果

1．配布数・回収率

配布数172人、回収数141人（回収率82%）、有効回答数138人（有効回答率80%）であった。

2．対象者の属性

対象者は、2学年58人、3学年36人、4学年44人、総数138人であり、平均年齢は20.4歳であった。部活動経験は、【あり】129人（93.5%）、【なし】9人（6.5%）であった。アルバイト経験は、【あり】136人（98.6%）、【なし】2人（1.4%）であった。

3．実習適応感

実習適応感尺度得点の平均点は、70.62±6.02点で、学年別平均点は、2学年70.20±6.43点、3学年71.43±5.64点、4学年70.55±5.83点であった。学年間での実習適応感尺度得点に有意差はなかった。

下位尺度の得点を学年間で比較したところ、【自己評価】の項目では、4年生が3年生より有意に高かった。（$p=0.031$）また、【学習準備状況】の項目では、4年生が2年生より有意に高かった。（$p=0.008$）その他の下位尺度では、学年間に有意差はなかった。

4．シャイネス

シャイネス尺度得点の平均点は、72.20±10.64点で、学年別平均点は、2学年73.12±10.60点、3学年71.56±11.22点、4学年71.52±10.37点であった。学年間でのシャイネス尺度得点に有意差はなかった。また、下位尺度の学年間での比較においても有意差はなかった。

5．実習適応感とシャイネスについて

実習適応感尺度得点とシャイネス尺度得点に

相関はみられなかった。

また、シャイネス尺度得点の平均点を基準として、高い群をシャイネス高得点群（以下、高得点群）、低い群をシャイネス低得点群（以下、低得点群）として比較を行った結果は、表1に示した通りである。シャイネス高得点群は64人（46.4%）、シャイネス低得点群は74人（53.6%）で、高得点群と低得点群間での実習適応感得点に有意差はなかった。また、高得点群と低得点群の2群間で実習適応感尺度の下位尺度項目を比較した結果、【自己評価】、【学習準備状況】、【基本的信頼感】に、それぞれ有意差がみられた。【自己評価】では高得点群が高く、【学習準備状況】と【基本的信頼感】においては、低得点群の方が高かった。

考察

先行研究とは異なり、学年間での実習適応感尺度に有意差がなかったことは、学年が上がるにつれ、実習で求められる知識や技術のレベルも同様に上がっていくためではないかと考える。

実習適応感下位尺度項目の【自己評価】で、4年生が3年生より有意に高かったのは、4年生の方が実習経験も多いことから、実習場面でのストレスに対し、未熟な自分と向き合い、適切な評価が行えるようになった[2)]ためではないかと考えられる。また、【学習準備状況】において、4年生が2年生より有意に高かったのは、先行研究でも述べられているように、学年が上がるにつれ、実習で様々な対象と出会い、多種多様な施設での体験を重ね、自身の未熟さに気づき、専門的知識の統合や自己学習の必要性を自覚してきている[3)]ことが結果に反映されたからではないかと考えた。

次に、シャイネス尺度得点について述べるが、本研究では学年間に有意差はなかった。この結果については、対象の90%以上がアルバイトや部活動経験者であり、低学年時から対人接触機会が多く、早期に社会的スキルが培われていたためではないかと考える。

また、シャイネス尺度高得点群と低得点群間での実習適応感尺度合計得点と実習適応感下位尺度項目の【取り組み姿勢】にそれぞれ有意差はみられなかった。これは、シャイネスの高低に関係なく、学生が実習に真摯に取り組もうとする姿勢は等しく同じであるためではないかと考える。

次に【自己評価】項目は、シャイネス高得点群が低得点群よりも有意に高かった。これは、シャイネス傾向が高く、対人関係や実習に不安を抱えている学生ほど実習場面で自分をしっかりと振り返り、慎重に自己評価しようとするためではないかと考える。一方、【学習準備状況】、【基本的信頼感】においては、シャイネス低得点群の方が高得点群よりも有意に高かった。これは、【学習準備状況】に関して、シャイネス傾向が低い学生ほど積極的に周囲の人との情報共有を行い、学習のポイントを押さえ、事前学習などの準備を十分に行うことが出来るためではないかと考える。同様に、【基本的信頼感】においても、グループメンバー間での助言を肯定的に受け止めたり、教員に対し積極的に質問したりすることが出来るため、得点が高くなったのではないかと考える。

研究の限界と今後の課題

本研究は研究対象が1校のみであることから、結果を一般化することに限界があった。よって、今後、他の集団でも調査を行い、対象者の拡大を図る必要がある。

表1　シャイネス高得点群とシャイネス低得点群での実習適応感得点の比較

n＝138

	シャイネス尺度	シャイネス高得点群 n＝64 (46.4%)	シャイネス低得点群 n＝74 (53.6%)	p値
		M±SD	M±SD	
実習適応感尺度得点の合計		70.39±5.91	70.82±6.15	0.954
下位尺度	取り組み姿勢	21.72±2.48	22.42±2.44	0.103
	自己評価	20.28±2.66	18.35±3.41	0.000 ***
	学習準備状況	15.19±2.25	16.05±2.69	0.040 *
	基本的信頼感	13.20±2.44	14.00±2.10	0.039 *

Mann-WhitneyのU検定
***：p＜0.001，**：p＜0.01，*：p＜0.05

引用文献

1）高橋ゆかり，柴田和恵，鹿村眞理子（2005）：看護学生の実習適応感に関する研究（第1報）―尺度作成の試みと信頼性・妥当性の検討―，群馬パース大学紀要第2号，37－46.

2）高橋ゆかり，柴田和恵，鹿村眞理子（2005）：看護学生の実習適応感に関する研究（第3報）―実習適応感に影響を与える要因の分析―，群馬パース大学紀要第2号，59－66.

3）高橋ゆかり，柴田和恵，鹿村眞理子（2005）：看護学生の実習適応感に関する研究（第2報）―実習適応感に影響を与える要因の分析―，群馬パース大学紀要第2号，47－57.

4）鈴木裕子，山口創，根建金男（1997）：シャイネス尺度の作成とその信頼性・妥当性の検討，カウンセリング研究，30，245-254.